

(別紙)

平成22年度 協働のまちづくりフォーラム 基調講演

群馬県の高崎から参りました、高崎経済大学の櫻井と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。この厳肅な空気の中ですね、回りのケーブルテレビの包囲網にはなかなか雰囲気は苦手でございますので、どうぞ皆さん笑顔で後ろを向いていただきたいと思ひます。さて、今日はですね、実は、ちょうど一年程前だと思ひますけれども、三沢市の市民の皆さんに一度お話しさせて頂いたことがございます。そのときにご参加頂いた方ってちょっといらっしゃるでしょうか、どれくらい?数名・・・あつ結構いらっしゃるね。はい、ありがとうございます。それから、ちょうど一ヶ月ほど前に今日も何名かお越しだと思ひますけれども、三沢市職員の皆さんの研修を行わせて頂いて、まあ、三度目くらいになりましようか、またお伺ひさせて頂きました。今日はこういったフォーラムといった形で、また後段の市民会議のほうの、今日は司会の方もご依頼頂いておりますけれども、市民会議の皆さん方のディスカッションもございますので、ある意味市民の方に大きく開いた形での協働の議論、まあまさに今日が始まりというふうに位置づけてもよろしいのではないかなと思ひます。ですので、昨年お話を聞いていただいた皆さんには、ちょっと重複するところもあろうかと思ひますけれども、復習もかねてまた新しい話もさせていただけたらなというふうに思っております、どうぞよろしくお願ひいたします。

で、この協働によるまちづくりということなんですけれども、早速ですが、まああのそうですね、この近くですと、八戸市さんなんかはまた全国的にも注目されるような動きを、この間進めてきていらっしゃるんですね。それから、これは本当に沖縄なんかもそうですね、どこに行きましても、とにかく協働のまちづくりという言葉が共通のキーワードになってきております。おそらく、この言葉をですね、自分の町の総合計画ですとか市の方針の中に位置づけていない自治体はないんじゃないかなというぐらい、ある意味広がっている、いや蔓延しているというか。しかし、中身ですね、やっぱり大事なのは、わかってやっているのか。中身が伴っているかどうかというあたり、さらに現実的な問題になってきているのかなと思ひます。まあそういう意味で、少し今日は協働の考え方を皆さんにご理解いただくような、そんな時間にして頂ければと思ひます。これからどうしていくんだという具体的な行動の前に、まあ、協働という考えをやはり今日は理解して、そんなフォーラムに位置付けていただきたいと思ひます。今日は皆さんのお手元に2ページものの資料というかレジユメをお渡ししておりますので、それに沿って話を進めていきたいと思ひます。

今日はね、私朝6時半に自宅を出てきたんですけれども、ずっと来る途中本当に雲一つない晴天でして、こんな日にフォーラムなんて受けられるかと。そういう気持ちにさせてしまうようないい日取りでした。しかし、こうしてカーテンを閉めまして密室の中で市民の皆さんと議論していくわけですが、こんな晴れのいい日に集まって頂いた皆さん、本当に志高い皆さんだと思ひますので、その分私もひとつ今日は力を入れてお話ししていきたいと思ひます。

その一番目のところですね、なぜ今市民協働なのかというふうに、ちょっと根本的な問題に差し戻りたいと思ひますね。これは、一年前のお話でも、それから職員研修でもどこの自治体へ行っても一番だけは同じことを申し上げるようにしています。その最初に四角に、多様化する地域の課題と書いてあるように、協働っていうのは、協働のために協働するんじゃないんですね。何かそこに多様化する地域の課題と書いてあるように、難しい地域の課題が増えてきた。なかなかこれをこう解決していくということが難しくなってきた。ということが前提として大事かなと思ひます。先日あの、そこに

過疎高齢化と書いてありますけど、山形県かどっかの講演のときにも、ちょっと同じことを言ったような記憶があるんですけども、ちょっと最近あれですね。話変わりますけど、最近熊が出没してるってニュースが。三沢は熊でないでしょ？出ない？都会ですからね、ここは。熊は来ないと思いますが。熊がすごく出てきているんですね。たまたまそれを山形県で話したと思うんですけども、山形県の長井市というところの中学校に熊が出たんですね。ちょうど学校に生徒が通学する前の朝の早い時間だったので助かったっていう話だったんですけど、私も長井市の政策顧問みたいなことやっているものですから、それ以後もう長井市には行かないぞって思ってるんですけども、危ないからね。とにかくちょっと興味があったんで、調べてみたんです、その山形の講演のときに。そしたらですね、この4月から9月までに、全国で目撃されている熊の件数が7,200件ありました。全国で7,200件目撃されている。ところが、去年の同じ時期は、4,200件目撃されているんです。去年の同じ時期の4月から9月までに。ということは、倍とはいいませんけども、1,8倍ぐらいの件数で熊の目撃情報が増えているし、10月を入れてませんから、相当な件数で熊が里に下りてきているわけですね。私の妻は北海道の出身なんですけれども、妻の実家のすぐそばのある町では、商店街を熊が歩いてくるといふニュースでも報道されておりますけど、犬や猫じゃないんだからっていう、それぐらい熊が下りてきている訳ですね。自然現象を見てもかなり変化が起こっている。それから、青森ですからあれですよ、陸奥湾のホタテ、有名ですよ。なんかホタテも詳しい人がいると思うんですけど、あの夏の高温で中の身がない、死んじゃってるっていう。なんか湾によっては港によっては例年の2割くらいしか水揚げ量がないっていう。それから、宮城県の松島の牡蠣、広島のお牡蠣、こういったものも例年の2割3割っていう。要は、熊も牡蠣もホタテも、この夏の高温がどうも影響して、まあ餌がないのか、海水が暖か過ぎちゃって身が育たないっていう、こういうことの話なんです。ただ、これを冷静に考えると、実は私が住んでる群馬県ってすごい暑いところで、去年は42~30の日がずっと続いたんです。今年よりも去年の方が暑かったかなと。今年も40前後の日がずっと続きましたから。この40前後と当たり前についている自分もちょっとおかしいんだけど、気象庁が示している一番涼しい所の気温ですから。実際の気温は42~30。私の大学のキャンパスに行くんですけども、どうも去年あたりから異常に暑くなってきている。ただ、こう少し下がって考えると、この熊が出てくる、ホタテがどうだ、牡蠣がどうだっていう、こう気象条件ひとつとってみても、今まで私たちの社会が経験してこなかったような問題が起こってきているわけですね。なんかこう、ニュースのネタにしているんで、いつかなんとか良くなるんじゃないかなって、もしかしたら私も含め心で思っているかもしれませんが、おそらく、この問題はもっと深刻になってくるでしょうね。本当に熊が商店街に下りてくるっていうのが当たり前とはいいませんけども、そんなときがもしかしたら来るのかもしれない。気候とか気象条件をとってみてもそうだし、ちょっと辛口でいえば政治や行政の動きを見ても、日本はまさに混迷の時代に入っていますね。民主党政権は、財政出動でいくのか、いや小泉改革のような市場原理路線でいくのか、右なのか左なのか前なのか後ろなのかよく分からない集団になっちゃって、ちょっと困っちゃっているところもあったり、これは、自民党にいったって、どこにいったって、これは政権運営していくには大変な局面だと思います。我々も中枢にいろいろ政策助言する立場で関わっていくと、難しい時代だなと思います。ただ、今日皆さんに問いたいのは、そこに多様化する地域の課題にも書いてあるように、いやそれだけではない、政治や行政それから気候や自然現象、あらゆるものをとってみても、今までどおりのやり方ではもう前に進むことができないんだ、ということだけは前提として確認する必要があったなと。前例踏襲型のあの右肩上がりの時代のやり方では、まちづくりも、いや、身近な地域の暮らしを持続させていくことも厳しくなっている。どういう方向がいいのかわからなくて、国も、自治体も私をお呼びいただ

く様々な地域でもどうしたらいいかわからない、その手法をみんな、探しているんだけど、とにかくはっきりしていることは、今までどおりのやり方では前にいかないんだ。やり方を変えなければならぬんだ。いつか何とかよくなるということはもうないんだ。これから30年後の日本のGDPは世界第7位、8位とまでいわれています。トップは中国、間違いございません。第2位はインドでございます。アメリカは3位ですけども、インドにかなり開きをつけられての3位。日本は今世界第2位3位あたりを競っておりますけども、7位8位、もう7位8位6位なんていうのは、どんぐりの背比べで、途上国になっちゃうんじゃないかというぐらいのGDPの落ち込みが、もう既に経済学の領域ではでは当たり前にも予測をされています。今までどおりのやり方では、前にいかないんだ。改めて今日は、市民協働、協働というキーワードですが、何らかの手法でもって新しいまちづくりの仕方や、新しい私たちの暮らしのあり方を考えていく必要がある。その前提をまず、会場にお集まりの皆さんには持っていただきたい。ということが最初でございます。そして、そこに書いてあるように、細かくですね、地域の問題を取り上げていってもいろいろありますね。過疎とか、みなさんのご近所いかがですか、一人暮らし高齢世帯。今高齢者の夫婦世帯であれば、まあ、いずれかがお亡くなりになれば、必ず一人暮らしになる。息子娘夫婦のところに移られれば話は違いますが、そうやってこれから一人暮らしになりそうだなということも含めて考えていただきたい。皆さんのご近所はいかがでしょう？それから自然災害、最近岩手県宮城内陸地震。ここから近いですけども、地震災害が多いとか、それから犯罪の増加であります。それから農地、環境の保全の問題です。この春もまた、新たに減反がかなり進んで参りますので、米価もかなり下がっておりますが、私も新潟で米を作っているんですけども、そういった安い米に価格が下がるのに負けられないように付加価値をつけて、今年もキロあたり800円くらいで今、私の研究室でも売ってますけれども、学生達が今日あたりも販売していると思いますが、まあ、そういうことでしかし遊休農地、休耕田が増えることで、農業というよりは農地、地域の環境が荒れてきている。というようなことも地域の課題であります。それから、ちょっと変わったところで、そこに生き方探して書いてありますね。これは団塊世代の問題ですね。さっきちょっと控室で話題になったんですけど、私の大学院生は50代から60代のオヤジしかいません。男しか来ないんです。しかも20代30代いないんです。50代60代ばかり。ある方は会社経営されていて、ベンツで大学にいらっしゃいます。ある方は第一線の超有名な大企業にお勤めになって、退職を5年前にして会社を辞めて大学の私の研究室に入って来られて地域づくりを学びたい。何か地域に貢献する生き方をしてみたい。なんていう人が増えてきているのも、あまり信じられないお顔の方もいますけれども、これは今大変なニーズです。私あの関東圏域なんかで埼玉、千葉、あと横浜なんかに講演に呼ばれるんですけども、面白いテーマが多いんです最近。ここ笑うところなんで笑ってくださいね。「退職サラリーマンの地域デビュー講座」。地域デビュー講座に行かないと地域にデビューできないんですね。大丈夫かって感じなんだけど、みんな男です、来るのは。大体60前後の男性が、定員大体僕の場合には60~70名に限定させて頂くんですけども、大体100名くらいの応募がいつもあって、断って次回また来て下さいと。ですけど退職していますから、大体退職前後ですから、これ持つてるんですよ。退職金持つてるから駐車場には外車ばかりなんです。退職金もらって胸張っているのかと思えば、地域にデビューできずに頭のとっぺんが薄くなっているんですね。でも本当にこういうのが、ここ5~6年ですね、すごいニーズで広がっている。ところが退職サラリーマンのデビュー講座に、一番前に座っているのにね、30代の女性とか座っていることがあるんです。退職サラリーマンだつてのに、何しに来てるんだらうって思うんですが、数人います。30代の女性が。何で来ると思います？何で来ると思います女性の皆さん。自分のお父さんのために来ているんですよ。私のお父さんはこれなんですよ。会社、会社、会社。あと2年で退職なんで

す。多分うちのお父さんは会社を退職したら、行き場を失うと思います。趣味もない、生きがいとしてなんか趣味みたいなものもない、特技もない。会社だけが誇りだった父なので、何か退職した後に生きがいを持って欲しいと思って、こんな講座受けてみたらどうかな？ だけどお父さんに行ってもらう前に、まず私受講して、楽しそうかどうかを体験してから勧めようと思いますって。こういう人たちが本当に多い。これは群馬県や長野県に行っても、農村部に行ったら同じです。こういった、こういったものも新しい地域の課題ですね。でも私、日本は捨てたもんじゃないなって思います。退職してゴルフ三昧かと思いきやね、地域の役に立ちたいって、いっぱい来られる方がいっぱいいるわけで、実際私の大学を卒業した方も必ず町内会の役員になって、自分たちの今まで町内会になかった動きを作ったり、ある町内会をNPO法人にしちゃって、町内会を、なんか独立した事業体にしてしまった私の卒業生もいるんですけども、まあそういう意味では、期待も持てるが、だけど安易にこういったのが、新しい地域の課題ですよ。そうやって考えていくと、例えば災害などはそうですね、三沢市はどうですかね、消防団とか。多分編成率は高いかもしれませんが、平日の昼間消防団が出動できますかね？ きちんと。どうでしょう？ 皆さんの地元。わかりませんけど。大体東北なんかの農村部なんかを回ってますと、まず出動できないという回答が圧倒的に多いです。平日の昼間は若いのがいないから。だから、いくつかの地域を私、お伺いしている中でも、大火事があって、だけど消防団が消防署の消防車が来るのが遅くてね、広域のね。それで、団が出動できなくて、全焼するのを見守ってました、なんていう地域はここ2~3年でももう具体例が挙げられるくらい、結構知っているところがございます。だから、慌てて地域の方々が集まって、特に60過ぎの方ですね。ちょっと先生、と、消防団が出動できないのを俺ら世代は見守ってたんだぞ、と言うんです。消防団の経験は俺らあるんだぞと。だけど、年齢制限があるんですけど。消防団OB会として出動できるような仕組み作れないかと。なんて言ってね。だけど、消防はできないから、放水する車を持っていく、なんかそういう消防援助のような、そういう活動ぐらいできるんじゃないかと。先だってそんなワークショップをずっと町内会、住民の皆さんと重ねて、宮城県のある町では公式に町長が委嘱状を消防OB会として委嘱状をお渡しして、堂々と地域の安全を守っていきこう、なんていう取り組みを作っているところもございます。のように、とにかくかなりいろんな難しい問題が増えてきていますねということなんだが、今日お話したいのは、3行目ですね、これは一年前にもお話しした方にも申し上げている。これら全ての問題ではないが、実は多くの問題は、もう行政だけでは解決できないんだ。ということですよ。一人暮らし高齢世帯と上に書いてあるが、これは行政では対応できません。地域にいらっしゃる民生児童委員さんが一生懸命頑張られているというのが実態だし、いや、民生児童委員だけではもうやれないよと、高齢化時代ですから。というのが地域の実態。地域のそういった見守りや支え合いの力がなくて、1人暮らし高齢世帯を支えていくことすら、もうできなくなっている、という実状ですね。今日はそこには書いてないが、例えば子育ての問題なんかもそうですわ。私の住んでいる群馬県、青森県にもありますが、中央児童相談所というのが必ずあるんです。そこには児童心理士とか専門の職員がいて、子育てに悩む方々の相談にのっているんだが、我が群馬県ももう予約が殺到して、長蛇の列は作りませんが、相談に行くのに一週間、10日待ちっていうのが当たり前です。子育てに悩む人たちの。ところがある日の夕方でした。3年位前だったかな。その児童心理士さん群馬県、いや関東で有名なある女性の専門家が、私の研究室にいらっしゃったんです。なんかちょっと怒った雰囲気だった。なんですか？ と。私は子育ての話なんかできませんよって言ったら、いやいやいや。先生がやってらっしゃるその地域づくりとか、協働のまちづくりっていうやつをもうちょっとしっかりやってもらえませんか？ と怒られちゃったんです。あなたと私と何の関係があるんですか？ っつうの。でも真面目にいうから、まあその方どうも私の講演をよく聞いていらっしゃった

方なんですけれども、らしいんだが、要はこういうことなんです。私の相談所にやって来られる、およそ相談者の4割は、2時間3時間じっくり話を聞いてあげると、大体問題は解決するんだそうです。要は、話相手がないんだ。たった一人で子育てをして、だんだんストレスを抱えて子育てに悩み、相談するじいちゃんばあちゃん達と一緒に住んでいないから、ご近所ともつながりがなくて、相談する相手がなくて、子どもに手を出しそうになって、まあ虐待をしてしまったり、そういうふうになりそうな自分に気付いて、相談に来る。ところがおよそ4割は、ちゃんと統計を取ってらっしゃるんですけども、相談するだけで、話すだけで問題が解決しちゃうんだ。で、実はこういう問題っていうのは、まさに地域づくり。地域の中でそういう話し相手を作る。まあ、話相手っていえばなんだから、お茶を飲んだり、ちょっとこう話ができる環境を地域の中で作ってくれるだけで、実は問題の多くは解決するんです。というような意味で、地域づくりを頑張ってくださいませんか？という話なんです。だから、私たち専門家も頑張るのはもちろんだけど、地域の人たちの力があれば解決できることもあるんだと。なるほどなあと思いましたね、やっぱり。そういった問題も含めて、やっぱり行政だけでは解決できない問題があるんだと。そして、じゃあこれからの地域づくりは、何を目標にするべきかはその題にあるように、月並みだけれどもやっぱり求められるものは、そういう地域の人間関係をどう作ってイけるか。派手なイベントやお祭りをやることをあまり目的にしてはいけなかなと。お祭りやイベントを通して、やっぱり地元の地域の人たちと、どれぐらいきちんとつながりが作れているか、っていうあたりが、これからの地域づくりには大事なかなと。あの阪神大震災のときにも、町内会活動が活発だったところほど、亡くなった方の数が少なかった、というデータがあります。公民館活動が活発だったところほど、被災して亡くなった人の数が少なかったと、そういうデータがございます。今あれだけの地震がこの建物で起これば、避難などはできません。もうこの机の下に隠れるのが精一杯。避難訓練なんていうのは、役に立たないって言ったら失礼だけれども、意味なさないですよ。真面目に。問題は崩れた後の瓦礫です、建物の。その中から、どれだけ短時間に人を救い出せる人間関係が、地域の中にあるかどうかということが人を救う、命を救われた方の多い少ないを決めたんだと。町内会活動や公民館活動が活発だっているところは、日頃からそういう人間関係があって、「う〜ん、多分この崩れた建物の中におばあさんいるんじゃないか」とかね。おばあさんがいることは知ってるけれど、たとえばこの方はいつも平日の水曜日、金曜日は病院に通院されているんだ、とか、なんかそんなことを知っているだけでも、違うんじゃないかとかね。今日病院に行ってるんじゃないかなとか、言ってるその1分という短い時間が救われる命を決めるんだ。ということを阪神の震災が我々に伝えている。改めて、そうした人間関係を育むような地域のイベントや、地域の取り組みを積み重ねてきているかどうか。いや、これからはそういったことを大事にしていかなければならないよと。そして、繰り返すだけれども、行政だけでは解決できない。改めて市民の皆さんの力もないと、解決できない問題が増えてきているから、協働なんだと。いうことであります。そこに掲げた問題はほとんどですよ。犯罪の課題。これは地域の防犯パトロールの皆さん方の活躍があって、なんぼのもんで。警官の数、どんどん増やす。こんなことはできません、今の状況では。警官を増やしたからって問題がなくなるとは限りません。実際皆さんも勉強されていると思うが、公園とか地域の花壇なんかをきれいに整備しているところは、犯罪が起これにくいとかね。要するに地域の人たちの目が、ちゃんと行き届いているところにはそういった人は来ないんです。こんなデータも山のように蓄積があって、そういう丁寧な地域づくりや、人間関係づくりがあるかどうかということが問われていますよと。そして、行政だけの取り組みではできませんよということ。そして、2つ目。協働のまちづくりにとって大事なものは、今申し上げたように、地域の暮らしを支えていくという視点です。イベントをするために協働するのでありません。暮らしを支えていくために協働するんです。イベントは、

やっちはいけないって言ってるんじゃないよ。1年を通して人と人との関係が、ちょっと希薄になっているよねと、毎日仕事仕事で忙しいし、1年に1度くらい、夏祭りや秋祭りで盛り上がったっていいじゃないかと。そういう人と人との関係が希薄になってるよねという課題を解決するために、イベントをやるんだよ。という言い方をすると、この祭りは昔からやることが決まっているんだ、やらなきゃなんねえんだお祭りを、とでどっちが行きたくなるか、という問いかけでもいいかと思えます。そういう人と人との交わりが少なくなっているという課題を解決するために、イベントをするんだ。昔は、もうほとんど農村でしたから、秋の実りの時期を皆で祝うために秋祭りがあった。だけど今は、もう農家自体がなくなっているわけで、お祭り自体の目的がだんだんだんだん薄れてきてしまっている。いつも同じ人が実行委員をやらなきゃいけないとか、いつも集まる人が限られているとか、そういう意味では、改めて何のためのイベントなの？何のためのお祭りなの？っていう目的をもう一度確認しなければならない。そういう時にも来ている。だけどよくよく考えたら、さっきも言ったように、仕事仕事、景気はこういう状況ですから、毎日自分の暮らしに精一杯。せめて年に1度くらいみんなで集まってみようやという、そういう課題解決の発想もありなんではないか、という意味で、暮らしを支えるという視点は大事だと思います。

ところが、次大事ですね。自己完結することの限界。ちょっと難しく書いてあるが、要はそこに下に町内会と書いてあるように、三沢市でいえば町内会、町内会だけで全ての問題を解決していくということが、果してこれからできるかどうか。今やれているという問題と、これからどうかっていうことは別ですからね。自分達だけで解決していくっていうことが、だんだんだんだん難しくなってきたんじゃないかと。さっきの中央児童相談所の専門家は、僕は素晴らしい専門家だなと思っております。専門家っていうのは、自分で全部解決できるって思うから専門家なんです。私達にはできないことがあるから、地域の皆さんに子育てしている人たちの集まる場所を作ってもらいたいです。自分達だけでは、中央児童相談所の専門家だけではできないことがあるから、自分たちだけではできないから、地域の皆さんの力をお借りしたい。ここに協働の発想が生まれるわけです。繰り返すですけどね。自己完結することの限界、ここにも書いてあるように、これ全部三沢市にありますよね、全部というか町内会、NPO、事業者、あるいはちょっと遠くても大学とか、各種団体、そして行政もその一つですよ。なんでもかんでも行政との連携だけではない。行政の力なんか借りなくたって民間同士の協働だってある。だけど、行政の力も借りなきゃ。だけど行政ほど、市民の力を借りなきゃならないことは、今はもうないでしょう。行政も同じ。皆が同じような対等な関係で、自分たちだけではできないことがある。したがって3行目にあるように、それぞれがどのような関係を作っていくか。ということが、今問われてきているわけです。しかし、例えば、東北なんかもそうですし、中国九州地方なんか回ってみても、町内会同士が、例えばですよ、連携するとか、町内会と事業所が連携するとか、連携するということが極めて日本では苦手です。特にコミュニティ。なんででしょう？全部役所がやってきたから。行政は住民の暮らしを支えてきたという歴史。ちょっと誤解かもしれないが、そういうものがあるから、隣なんかと連携しなくたって市役所に行きゃあなんとかなる、行政とコミュニティとの関係だけで成り立ってきたところがあるので、横に目をこう向かおうとしない。まして連携して一緒にやりましょう、なんていう発想はなかなかこう、生まれにくい構造になっている。しかし全国では、もう現実的にこれは八戸市もそうですけども、そこにも書いてますが、住民自治組織ですとか、少し町内会と連携したような枠組みで改めて自治組織を作って、みんなで地域の問題を解決していこう、なんて動きを作っているところも結構ございます。民生児童委員の数が町内会単独では少ないから、隣と一緒に民生児童委員をサポートする福祉協力隊なんて名前をつけて、連携した枠組みでそういう新たな人材を作って福祉を支えようとしている地域もございます。自分た

ちの地域のことをよく見つめたときに、自分たちだけではできないし、かといって町内会という小さな単位で、人選を含めてまた役を決めてたりしたら、大変じゃないかと。少し広域的な枠組みでやってく工夫もあっていいかなと。なんていう知恵が生まれているところは東北にだって、もうこの間たくさん現れています。繰り返しだが、方法に答えはない、こういう方法がいいよということはないんだけど、今までのやり方では続かないなと。いや、問題が解決していかないな。ということがあって、協働の議論になってきているんだ、ということ。ここはまさに三沢市の外の全国的な動向としてご理解いただきたいところであります。だからそこに書いてある住民自治組織とか、地域自治組織なんか年間の仕事は大体8割くらいです。これだけです。沖縄に行ったって地域自治組織ですから、那覇市は。どこ行ったってこれです、今。とにかく地域の暮らしを持続させていくために、力をつけなければならない。今名古屋市で民主党の元民主党の河村市長がいろいろと議会ともめているけど、あれの問題の根源は、住民自治です。名古屋市の住民自治改革っていうことで改めて地域が力を持たなきゃならない。そういう議論が、なんかマスコミに取り上げられてあんなふうになっちゃったけれど、実際には住民に地域に力をつけていくための、新しい道筋を考えなきゃならないという中での、まあ混乱でもあります。繰り返しだが、各地では今こういう形で、自分たちではできないことがあるから協働なんだ。ということへの取り組みが始まっているんだということでもあります。

2番目。新たなまちづくりの展開というところであります。さて今日は、1年前にちょっとお話をしたことと趣向を変えて、その一番、これはもうお集まりの皆さんは知っている言葉だと思いますが、この地縁型志縁型という言葉、まあ地縁志縁と四角枠で囲んだところ、ぜひ今日は頭に入れてお帰りいただきたいと思えます。ちょっとこう、まちづくり地域づくりの話をしてみようと思うんですけどもね、これからお話する事例には協働の要素はたくさんございます。今日は協働を理解していただくということですので、そこに書いてある、地縁というのはまさにこういうエリアなんですね、地縁というのは。町内会というエリア、だからエリア型なんて言ったりしますね。この町内会で暮らしていれば、黙っていても町内会費は取られて、町内会のメンバーになる。当たり前のことですね。俺、この町内会の会長さん嫌いだから、今年こっちに入りたいとか、そういうことできないですね。日本は地域社会が崩壊したと言われて久しいですが、しかし先進諸国の中では、こんなふうにちゃんと町内会自治会が残っているなんてところは、実はそう多くありません。日本にはやっぱりまだ地域社会はちゃんと残っています。イギリスは日本の改革には進めようとしている改革の20年くらい先をいっているなんていわれていますけれども、イギリスの農村部に行ったら、もうコミュニティは存在していません。だからイギリスの農村部は、農業政策ではなくて農村対策が農村、村を作らなきゃならない。コミュニティを作らなきゃならないってのは、今のイギリスの地域づくりの改革の最前線の動きです。それに比べてみると、日本の地縁組織っていうのはきちんとできています。そして、地域づくりだけを考えてみればこれはすごく大事です。なぜ。そこに1行書いてありますね。情報発信網としてやっぱり地縁が大事です。全戸会議はちょっと言い過ぎかもしれないけれど、なるべく多くの世帯が入るということが基本原則ですね。それから、地域の合意。地域で何かを決めるのもやっぱり地縁です。地縁でなければ地縁だからこそ皆で決めて前にいける、という雰囲気ができるんだなど。ちょっと欠点もあるね、地縁には。一つのことを決めるのに2年も3年もかかったりするんですよ。そのうちやっていることを忘れられたりね。だから、歩みは遅いが、一度決めればグーッとこう前にいくという地縁のいいところがある。ところが右側。問題は、事業の継続性って書いてありますね、お祭りをやってもなかなか人が集まらないんだ、最近は。さっきも言ったように、運動会を毎年やって、実行委員決めただけ、やる人がいなくて困ってるとか。なかなか事業が進まなくなる。前のような盛り上がりがない。それから一番今日来てる方で多分多いと思うのは、担い手の問題だね。もう町内会

長さんだけやってるかと思ったら、いろんな役職がついている。なんかいくつもいくつもやってたって役を受けてからの最大の仕事は、役を終えるごとに次に引き受けてくれる人を探すことが最大の仕事みたいになっている。分かる？ここは笑うところなんだが。私が住んでる高崎市は37万ぐらいの都市なんですけれども、2年3年ぐらい前かな、こういった大きなシンポジウムをやったときにね、500人ぐらいが来たときでしたけど、ある方が質問をしてきた。役が多くて本当に困っているんだ、うちの理事長は役を6つも抱えて病気になってこの前倒れたんだ、と。役害だって言うんですよ。なかなかうまくいこうってね。確かに具合を悪くしたんだとまずいねという話で。だけど、なかなかやってくれる人がいないって担い手の問題ってありますわね。なのに、役を減らそうって考えないんだね。不思議だね。やり方を変えるってのは、まさにこういうところにありますわね。今各地では、こういった役を重複する、似たようなことを一緒にしていこう。なんていう取り組みを進んできています。高齢化時代ですからね。担い手が減る一方ですから。まあだけど、そういう問題があります。ところが一方で、今日来ている皆さんの中にはNPOの方もおいでだと思うね。その隣に書いてある、志縁ってやつ。下に書いてありますね。志の縁って書いてあります。これは1本の志に人々がこう集ってくるのを志縁っていいますね。志の縁。エリア型じゃなく、こちらは一つのテーマに人々が集まってくるからテーマ型って言うね。例えば子育て支援っていうと、若いお母さん方が来るとか。自治体や町内会が集まってきて、っていうときはあまり来ないんだけど、子育て支援だと、私それやりたいわ、とか。あと、環境問題。環境問題なんかはでっかいことやんなきゃいけないよね。リサイクルの取り組みとか。なんかそういう具体的な個別具体的な取り組みに対して、私それやってみたいと言って、集まってくるのを志の縁。志縁といいますね。そこに書いてあるとおり。この人たちは地域課題への明確な関心と実践力を持っています。とにかくやるんです、とことん。やりたいことは、目的を持って行動するわけです。それから、次大事だね。地域の外とのつながりがうまいのも志縁でございます。私も群馬県の高崎に住んでいながら、宮城県仙台市のNPOの会員でもありますし、新潟県のNPOの会員でもあります。地域、関係ないです。志ですから。気持ちが繋がりがいいんだから。このNPOこの市民活動支えたいなと思ったら、会員になって会費を年間あたり納めて、時々時間が空いたときに、ボランティアで手伝いに行くみたいに。そういうことができるのが志縁。こっちは、町内会エリア型は、それが苦手だ。町内会費を払った人だけが構成メンバーですからね、基本は。もちろん町内会が外と連携することは全然OKなんですけれども、あんまりそういうふうには考えない。中に中にこもろうとするのがエリア型なんです。そのことを地域の協働性が強いとか、まとまりがあるというふうに我々は言うんだけど、逆を言えば外と繋がるのが苦手。というふうにもいうことができます。そして最後書いてあるように、特定市民と書いてあるように、ちょっとね、会場にお集まりのNPOの方には恐縮な言い方だけど、特定の人取り組みますから、限られた人だとよくいいますから、地域への広まりがない。というのがこういった志縁の欠点でもあります。いいこともでもあるんだよね。すごく動きやすいから。広まりがないから。欠点でもある。だから私もよく言われるんだけど、出る杭は打たれるんだね。こう、余計なことを言うと杭のように長いですからね、頭たたかれるんですよ。だから、頭絶壁なんですよ、ここ。「うちの地域のこともわからないのに、大学の先生に何がわかるんだ」なんて言われるんだけどね。というふうに、ちょっとそういう欠点もある。要するに私が言いたいのは、どちらにもいいところと欠点と長所がある、短所長所がある。まあ、杭も。そして今までの日本の地域づくりは、これとこれは別物だといいました。こっちは何かやりたいといって集まってくれたし、町内会はやりたがるうがやりたくながるうがやらなきゃなんねえんだ。なんでこう、べらんめえ口調になんきゃいけないんだっていうんだけど。こっちはちょっと疲れた。解散してもいい。リーダーが病気になったってことを理由に、やめようと思う。こっちは、人が住ん



でいる限りやめるわけにはいかない。だから、こいつとこいつは別物だと言われてきましたが、私東北生まれなんですけれども、田舎者の私はですね、こんなの分けている場合じゃないですよ。これからは埋め込んでいく作業があるじゃないですか。地縁の中に志縁を埋め込んでいく作業があるでしょ。お互いが連携していかなきゃだめでしょ。協働の時代なんだから。例えば、自治会の集まり、町内会の集まりに来てって言うてもなかなか来ないんだけど、子育て支援っていうと、なんか若いお母さんたちが、さっき言ったみたいに集まってくるとか。なんか地縁の取り組みに縦のこの志縁をさしていくというか、そういう関係づくりが大事じゃないかということなんですね。ちょっと具体例を話しましょう。いくらでもあります。今日はちょっとね後段のトークセッションの中に面白い取り組みが出てくるようなので、ちょっとそれと関連してるかなと思って、ご紹介しようかなと思います。宮城県のね、新幹線に乗っていくと古川ってあるんですよ。ねえ、仙台の一つ下。あの古川ってところは西古川っていうエリアあって、そこはもう見渡す限り水田で、田んぼのど真ん中に公民館がぽつんとあるんです。実はその公民館に今から6~7年ほど前に、一度講演に呼ばれたことがあるんです。地元の町内会長に呼ばれたんです。わざわざ群馬の高崎まで電話が来たんです。物好きな人だねって思ったね。近くに大学ならいっぱいあるのにね。先生、うちの地域に来て一度講演してくれないかなと。勉強会の講師をやってくんねえかと。ああ、いいですよ。ところで、わざわざこんなところまで電話かけてくるなんて、何かあったんですか？と聞いたら、いや実は、自分は今回役員の改選で初めてこういう、地域のね、町内会とか自治会のトップになったんだ。任期は2年なんだ。で、実は僕はやりたいことがあるんだ。それはなんですか？と聞いたら、いや町内会自治会の集まりに、どうしたら若い人に来てもらえるのか。それをどうしても実現したい。若い人も参加してくれる、そういう自治組織にしたいんだと。いや、いいですよ、やりましょうよと。で、行ったんです。そしたらね、いっぱい本を読んで勉強したんだね。ところがその本に書いてあるタイトルがみんな同じなんだ。コミュニティビジネスって書いてある。なんかね、カタカナで舌噛みそうだよ、コミュニティビジネス。コミュニティビジネスを俺はやりたいんだって言うんだ。その会長さんは。ああそうですか、って。コミュニティビジネスって皆さんご存知ですかね、あの、この辺で野菜とか山菜とかの直売所がありますね、あれ、ただ売ってんのは直売所です。あれ、儲けてるだけです。売ってるだけです。あの売上げの5%でもいい、10%でもいい、何か地域の課題を解決することにその売上げの一部を回したら、コミュニティビジネスというふうに言います。ただ、直売所をやっているだけはビジネスです。コミュニティビジネスというのは、売上げ収益のわずかでもいいから、地域の学童クラブに回したとか、お年寄りが集まるサロンなんか、まちづくりの財源にしたとか、なんかそういうことに回せばコミュニティビジネスといえます。そういうことをその会長さんはどうもやってみたいというわけだ。いやいいですよ、やりましょうと。早速、コミュニティビジネス部会というふうに、その自治会の中に部会を作って、全戸配布をしてチラシを回したんですね。そしたら、あの来ましたよ。7~8名の、その若者が。公民館になんか来たことがねえっていうやつらでした。ところがその若者たちは、この言葉にどうも興味を持ったんですね。若者たってね、30代、えー40代もいたね。精神年齢が若けりゃいいんだよ。まあなんでもいいんですけど。来たから、それで、その町内会長さん、自治会長さんね、なんかこう、嬉しかったんですね、自分の思いが通じたかなと。で、この若者たちが部会の活動を始めたわけです。これがね、若い人ってすごいね、発想が。何を考えたんだか知らないけど、先生見てくれと、この公民館の回り。田んぼが広がってるけど、田んぼじゃねえからね。米を作っていないから、みんな減反、減反で、みんな休耕田、遊休農地だから。この畑をまず何かに使えないかなとその若者たちが言ったんです。それでその新幹線が止まる古川駅っていうのが、人口が8万人なんですけども、年間あたり何十組か転勤で移動されて来る方がいる。もしかしたら、

おふくろが仕事に行ってお奥さんが、妻が家にいたりすると、お友達もいなくて子育てしながらさびしくしてんじゃないかと、この若者たちが言うわけなんです。じゃ、その転勤でいらっしゃった方々の交流の場所を、この遊休農地を使ってできないかっていうふうなわけですよ。じゃ、何か作んなきゃない、作物を。じゃがいもを作ろう。手っ取り早い。で、じゃがいもクラブって名前を付けてじゃがいもを作ることにします。そしたらね、最初的时候、大体親子で、えー40人くらい、20組くらいの親子が来たんだ。大体、女性が子連れでやっていらっしゃるんだけど、そうやって、じゃがいもクラブの活動が始まった。ところがある日、楽しい交流をしていたはずなのに、ある女性が、参加してる、話してくるんです。もうじゃがいも作りやめませんか？ってわけ。なんで？うちの夕飯最近カレーライスと肉じゃがばかりなんです。そりゃそうだね、自分で作ったものだから捨てられねえやね。そしたらその7~8人農家の息子娘たちも参加してるんだけど、うちの母ちゃんに、もうじゃがいも持ってくるなって言われる。食いきれねえって言って。このじゃがいも、金に変えようかという話なんです。だけど、あんたじゃがいもなんて買う人いるかいと。スーパーで買ったほうがよっぽどきれいで安いのが手に入るんじゃないかっていう話だったりして。ちょうど夏だったんで、よし、ビアガーデンやろうと。そのじゃがいもを使って。みなさんの町内会で、この三沢市の中でもビアガーデンも結構あると思うんですけど、この自治会は初めて、ビアガーデンをやるという企画を、この若者たちが考えたんです。ところが、若者たちは2つ条件をここで出します。1つは、地元の食材だけを使って料理を提供すること。2つ目。作る調理をする人、サポートをする人は全部地元の人材を使うこと。公民館のお料理教室で、活動している人。食生活改善推進員さんっていますよね、地域に。食改。こういった人たちを使って、食べ放題飲み放題3,000円でビアガーデンをやりましょう。こういう企画なんです。私、第1回目のビアガーデンに行ったんです。びっくりしました。何度も講演に行ってたはずなのに、そんなにたくさんの方がいつも集まらなかったのに、このビアガーデンはすごい人が来たんですよ。椅子が足りなくなっちゃった。まず。食べるものが足りないくらいに人がいっぱい来たんです。みんな地元の人なんです。問題は、私のすぐ傍に座った80のおばあちゃんがね、片手で、ジョッキでビール飲みながら、いやぁ先生って、飲んでるわけですよ。こんな集まり久しぶりだっておばあちゃんというわけです。あたしゃ年寄りだけどなかなかこんな集まり最近ないよって言うんです。大体年寄りが集まったら、病院の待合室くらいなんです。そしてそのおばあさん、なんか本当に楽しそうなんだわ。で、その若い人たちがバンド始めたかと思うと、高齢の人達が、なんか三味線だ民謡が始まったりね。尺八だとか。なんかこう、若い人から年寄りからみんな交わるすごい面白いビアガーデンがあったんだが、ここからが問題。なんで、たくさん人が来たか。なんで人がいっぱい来たかです。ビールが飲みたいからかい？違うね。この若者たちの企画はやっぱりすごい。地元の食材を使ってピザを焼いたり、本当にこんなにおいしいものができるのに、いろんなもの、チラシを作らしたって、広告ね。見事ですよ、若者が作るの。ところが、全戸に回してくれっていったら、これは地縁の力がないとダメなんです。わかりますか？もし若者たちだけでコミュニティビジネスなんか始めてビアガーデンをやっても、多分人は来なかったと思います。なんか若いやつらが変わったことを始めたな、ぐらいの話で。これは、志縁のいいところと地縁のこの面的な広がり両方が重なったんで、うまくいったわけ。両方のいいところは、だから自治会長とか町内会長も言うけれども、こんな企画俺らに絶対無理だって、先生。1年目、96,000円利益が出たんです。これは全額コミュニティビジネスですから。新しい、それこそ子育てとか、高齢者のサロンとか、そういう事業に回した。2年目、113,000円利益があがったんですよ。どんどんどんどん、少しずつだけ事業が拡大して、全部地域の課題解決に回す。最初はね、ちょうちんもぶら下がってないビアガーデンで、畑の中でね。そのうち、ちょうちんもぶら下がったりね、ステージが出来上がった

りね、いかにも手作りのピアガーデンなんだが、言いたいことは、両方のいいところ、得意不得意なところお互いがあるんだけど、それを補い合える関係を作ったんでうまくいったって話ね。こういうのも、協働ですわね。自分たちにできないことを、町内会でできないことを志縁が補います。若者たちだけではできないことを地縁が補っていく。だから協働は、ここが大事だね。つなぎで、接点ですわ。つなぎ役がいてくれないと、なかなかこういうお見合いは成立しない。この場合は、そう私に電話をくれた、あの町内会長さん。その方が、結び手となって、まっ展開したわけだね。というふうに協働は、こういったつなぎ役というふうに今日は覚えていただきたいのですが。人でもいいし、施設でもいいし、拠点でもいい。何かそういうつなぎ役がいてくれないと協働は前には進みません。ついでに地域づくりの世界では、この縦糸と横糸っていいです。地域づくりは、セーターを編むようにやってるんだぞ、縦糸と横糸でございます。そんなふうにして、協働の関係をやって、前に進む。今はこの地元にいけますと、黄色いテントでじゃがいもクラブって直売所がある。人気は出ましたね。毎週楽しみにしてらっしゃる方がいて、かなり年間を通じて収益もあってっていう、そんな事業体にもなっているんですが、ま、こういう協働もありますよ。繰り返しだが、お互いの得意不得意を補い合える関係だということですね。今日、ケーブルテレビに撮られているから言いにくいんだけど、宮城だし遠いからまっいいか。ちょっと実は納得できないことが1つありましてね、私実はこのピアガーデン1回行ったんですけど、招待されなかったんですよ。なんだ、おかしいなって。招待されない。先生ぜひ一回きてくださいっていわれたんで喜んでいったら、受付で会費3,000円ですって。席は、どうぞ空いてるところに座ってくださいって。あゝそうかそうかと。2年目、その言葉が聞こえたのか、招待状が届いた。おっ今度は招待だって思ってずっと一番下を見ていったら、会費3,000円ですからね。行きませんでした私。忙しくて行けなかったんだけど。でもいいや、楽しく盛り上がってきたからまっいいやと。こういう協働の関係もありますよということでございます。さあ、ですから矢印の後に書いたように、相互連携とか、あるいは補完、補い合う関係が協働の大事な発想の考え方でもあるということです。繰り返しだが、自分たちだけではできないことがあるんだ、ということが前提であります。一番、もう1つ今日理解頂きたいのは、協働というのはプロセスですよということなんです。協働は点ではありません。プロセスです。どうしても協働といったときに・・・ちょっとね、いろいろ全国回っていると面白いことを言う人がいるのね。あまり、ケーブルテレビがあるから言えんな。んと、あるとこでね、うちはね、行政職員と市民とで草刈やってるんだ。協働のまちづくりだっていうんです。えっ、その協働って、この共同でしょ。共同作業の共同でしょ。一緒に力を合わせて頑張ってるなんてこと、今までの歴史にたくさんあるんだ。これとなんで13の力が働く協働が違うかはあとでお話しますけれども、これはあまり協働って言わない。そしてもっと大事な事は、草刈してるところを協働ってその方は言っているわけだ。何か事業や活動しているところを協働って言ってるんだね。もちろん、何かやるときに協働することもあるけれど、そこに括弧に空欄がありますね、一番左は、ちょっと難しい言葉ですが、地域課題というふうに書き入れてください。今日、冒頭で言った、たくさんある様々な地域課題ですね。地域の課題が、もっとわかりやすく言えば、何か問題があるから力を合わせなきゃなんないんだよね。問題がないことはいいことだと。ここにすごく歴史のあるお祭りや神楽があるんだ。これを何とか守っていきたい。だけど、私たちだけじゃ守れないという地域の課題があるから協働するんだよね。というふうに問題があるから協働だと。そして、もう1つの括弧に入るのは、ちょっと難しい言葉で言えば、協議というふうに言ったりもしますが、私はなるべく砕いて言いたい人なので、話し合いなんていうふうに、そこに入れたりもします。何か問題があるということがあるから、事業に行くんじゃなくて、その前に一緒に話し合っ、あなた何やる？私これやる、っていう、そこで役割の分担したい。お互いがどういうふうにこの関係で役

立つのかっていうことを議論するわけだ。行政と市民との協働もそうだね。いきなり事業をやることをあまり協働とは言わないんです。町内会だけでは解決できないことがあるときに、よし、行政ではここを支援します。町内会ではこれをやりますから、という話し合いがあって、事業に行くわけなんだ。ここ大丈夫ですね。ところが、そのプロセスとしての協働のサブタイトルにもあるように、事業活動と、かぎ括弧ね。協議、話し合いと分けて書いてあるように、実は、このことばかりを協働と言っている自治体が多いんです。いいですか。一緒に活動することも協働なんだけど、お互い話し合ったりすることも協働の一部なんです。特に、行政と市民との協働なんていうときには、これ本当に大事だね。何年も今まで行政が補助金出したり、補助金を出すってことは金を出すってことは、やる内容まで決めてくるわけだけだから。自主防災組織を立ち上げて下さいってわけだから。考える話し合う余地ないわけだよ。やらないとだめなんです。けどもこれからは協働だから。お互いが対等だから。一緒に話し合っただけで役割分担しましょう。民間の団体だってそうだよ。自分たちだけで、観光協会とか商工会議所とかいろんなものがあるけど、地域には。自分たちだけでやってきた今までとは違って、じゃあ、観光協会と農協と連携して何かやるかとか。今独自産業の時代ですから、そういうの、どんどん広がってるんですね。けどもそういうときに、お互いにどういう役割を果たすかっていう話し合いがあって初めて、事業に出るわけです。というふうに、協働というのはこう一連のプロセスのことを協働というふうに言うんだ。これ大事な認識です。だからよく、行政の職員の研修なんかで、協働っていつになったら達成するんですか？っていうわけ。はあ？いやいや。いかにも役所的だね。どうやったら成果物になるのか？って聞くんです。いや、そういうのはないですよ。協働は終わりじゃないよこれ。事業終わったって、また次の新しい課題が生まれ、また話し合っただけで、事業って、こういうことだから。まゝぐるぐるぐる回っているわけだから。終わりはないんだ。プロセスです。協働は成果物ではありません。プロセスを協働。結果から見えにくいところもある。やった人たちの気持ちも、だから大事なんだ。いやあ協働したなど。話し合いの中で役割分担をして、一緒にやれたなっていう実感を持てるかどうか勝負なんで、なかなか行政の仕事としてもやりにくい。結果が、成果が見えない。だからこういう協働の研修は極めて大事だと思います。しかし、例えば全国の自治体では、そこに市民と行政との協議の場の必要性と書いてあるように、なんとこれを口だけじゃなくて、条例化している自治体もある。まゝ条例という硬いね、ルール化している自治体もある。そういう話し合い。きちんと話し合う手続き自体をルール化している自治体もある。そうやって、丁寧に協働のまちづくりを進めているところもあります。そしてそこに、社会資本整備というふうに例として書いてるのは、我が群馬県のことになります。群馬県ってね、総理大臣4人も出しましたから。しかも最近ほらご存知でしょ、あの八ツ場ダム。テレビに映るからあまり言えねえな。あのダムがすごく有名ですから。なんか、群馬県ってすごい公共事業に縁があるじゃない。イメージがあるんですが、実は群馬県庁県土整備部って土木部は、この県民参画ガイドライン、全国の都道府県でもめずらしい制度があるんです。何かっていうと、道路1本整備するときも県の事業で、地元住民と、協働して参加してもらって社会資本整備していくってことを、群馬県はルールにしている。わかります？意味が。群馬県だろうが、どこが青森県だろうが、この財政難。今までは要望を陳情すれば、あるいは、今日もいるかもしれないが、議会議員の皆さんや首長さんとの関係の中で、そういう社会資本整備が進んできた時代があるが、ところが、これからはあれもこれもはもうできませんから。あれかこれかの時代ですから。しかし、同じ地域からA、B、Cという3本の道路を整備しろという要望・陳情がきたときに、その優先順位をもう行政は決められません、というのが行政側の想いです。それは、地域の皆さんに話し合ってもらって、まずはA、次の年にC、次の年にBのような、優先順位自体を、もう行政では決められないんだ。地域の皆さんに参加して決めてほしいし、もっと大

事なことは、この限られた財源の中で、せっかく公園を整備したり道路を整備したりしているのに、要望陳情のときは盛り上がるが、整備し終わるとごみはポイポイ捨てたまま、公園の草1つ取ってこない。もうそういうものづくりは、群馬県はやりません。だから、道路整備、公園の設計段階から、地元の方に参加していただいて、キーワードはこれ、愛着のある社会資本整備をしていこうと。そういうところにすら、協働という考え方を導入しているわけです。私は人づくり、教育学専門ですから、人づくり・組織作り専門の私が、群馬県県土整備部のアドバイザーをやってる時代なわけですから。わかりますか？意味。もう完全にソフトの時代。人づくりの時代に入っています。ですから、道路を整備するというのは、これなんかはな、事業なんですよ、結果だから。形だから。そこにいくまでのプロセスが大事だと。地元の人たちに参加してもらって。面白いですよ、こういう話合いて。子どもはどれくらい住んでるんだ？って議論になって、そうすると、ちょっと待って、地元で目の不自由な人とか、障害のある人どれくらいいるんだ？とか。あるいは高齢者で運転免許を持って運転している人はどれくらいいるんだ？とか。そういう調査をやるんですよ、住民の人は。そして、自分たちの地域に合う、道路・歩道を整備しよう。だから、お亡くなりになった小淵総理の地元は群馬県中之条町というところなんですけれども、その中心商店街はまさに、その手法で作った商店街なんです。なんとなく人の賑わいがあるんだよね。なんか使いやすいとか。自分達たちの考えがこう入ってる。お店の人はなるべく自分の家の前のお店の前の道路の脇を高くしてほしくないとか。なるべくこう、道路にスムーズに入れるようにとか。隣の商店と一緒にそういう道路の搬入道を作ろうとか。なんかいろいろこう、話し合いが行われるわけ。まあとにかく、道路を整備することが目的じゃなくて、そこに行くまでのプロセスを大事にしましょうという、そういう事例として、この群馬県県民参画ガイドライン、ぜひご参考にさせていただきたいなあとというふうに思います。

はい、2枚目に行っていただいて。今日よかったです、6時半に出発して。だんだんと乗ってきました。どうなることかと思いましたが。さぁ最後はまとめですね。市民協働のまちづくりに向けて。さぁ、求められる市民力、行政力ですね。やっぱり、これから協働をしていくわけですから、お互いにやっぱり力を持っていないとあかんね。お互いに力を持ってないといけない。そのときの工夫を、今日は限られた時間ですが、お話したいと思います。番。この番のフレーズは、ぜひ今日は持ち帰ってください。協働のキーワードは、私たちに、できることとできないこと。この発想ですね。これ極めてください。今日冒頭から言っているように、自分だけではできないことがあるから、協働なんですよ。ということは、私たちにまず、できることはなんだろうなあと、いうことをぎりぎりまで考えてみる。そして、どうしてもできないものがあるはずだから、自分たちだけでは。それを行政のサポートをお願いしたり、いや、民間で何か青年会議所なんかのサポートをお願いしたり、商店街と連携したり、というふうに、できることとできないことって議論。頭の中の組み立て方がすごく協働には大切です。ちょっと乱暴な言い方をすると、今までは自分たちにできることまでも、行政をお願いしてきたかもしれない。いや、行政自身がやってあげていたかもしれない。日本はすごいですよ。犬や猫がひかれたって、市役所に電話1本かければ、数時間後にはなくなってますから。すごいですよ。街路灯の球切れた、もちろん町内会で管理されているところもあるが、全国を回っているとそれ自体、市役所に電話すれば、数時間後には新品になっている。私はヨーロッパの研究者にあのー、中国は社会主義、アメリカは自由主義、日本は何主義ですか？って聞くんだよね。意味わかりますか？そっちの国に見えるんだよ。だから、保守主義的自由主義だとかいって、わけのわかんないこといってごまかしてるんだけど。なんでかわからない。官治の国だから。官が治めてきた国だから。まあ、今もそういうところあるんだけどね。逆にこれからは、まず自分たちにできることは何かっていうことを、その2行目だね、市民だからこそできることがあるんじゃないかと。いうことを考えていくこと

が大事なと思うんです。ちょっと三沢市さんではどうなっているか知りませんが、最近全国を回って問題になっているのは、敬老会のときの高齢者の名簿。あれ個人情報の問題があって、今行政ではああいう冊子を作らなくなったよね。三沢市はちょっとどうか知りませんが。そうするとね、あの情報がないと困るんだっていう市民いっぱいいるわけ。まあ分かりやすくいえば、自分の同級生がまだ生きてるかの確認ですから、あれは。で、たまに、あつまだ生きてるんだって。それでこう安心するわけで。ところが、まあいくつかこう東北なんかを回っていると、ああいう冊子を市民が作っているとところがあるよね。ところが、どういう成果が生まれるか、おもしろいよね。町内会長は、これ地元のうちの高齢者の人たちまとめようがない、まとめようがないとかっていうもんだから、何とかみんなで作りたいと。だけど、1町内会で作ったって同級生っていったら市内にいっぱいいるわけだから。じゃ、みんなで連合組織作って、あの情報誌を作ろう。ところが、町内会長、副会長が頑張っても無理だよ。だもんで、さっき言った民生委員さん、それから商工会とか、そういうところと連携して、三重県の津市なんかでは、全戸回りして。全部1件の個人情報だから。全部確認をして載せてもいいかということも確認をして、掲載している。なんと、市役所が作ったときには掲載率が62%ぐらいなのに、市民が作ったら95%前後まで上がりました。ほとんどだから載せてもいいよって。つまり安心するわけだね。あつ、あなたが作ってるんですかと、こういう話だから。ところが、市役所が問い合わせをしたときには、特に当人、高齢者本人は載せたっていいんだけど、その家族がこれ悪徳商法とか何とかでいろいろ問い合わせが来ちゃったりするっていう心配があるせいか、載せないでくださいっていう声が多くて、あれ実際に掲載率っていうのが全国的に低いんです。ところが、市民がやることで90%までだからね。これはおもしろい話で、今まで載ってなかったのが、死んでたと思ってたのが生きてたのかっていう話だからね。これ本当にあったの。まだあいつは生きてたんだ、って。みたい。市民だからこそできることってあるんです。こういう事例いっぱいあるね。これは本当に協働だなと。だから、市役所に言ってやった。この冊子の、印刷費くらいなんか補助できないのかと。市民が全戸回りしてんだから。確かに冊子作ってこれね、印刷費も大変、市民の人ってうまいんです、見やすいね、名簿を作るんですよ。その印刷費の部分を市がサポートする。そういう協働が生まれてきたりもするわけだね。さっきの民生委員町内会長との協働もあるわけです。民生委員は知ってるから、高齢者のこと。そういう連携も生まれたりする。繰り返したが、市民だからこそできることがある。しかし、大事なことは、3行目。その前提としては、ちょっと今日は何度も同じキーワードを申し上げるが、地域の課題が見えているかどうかだね。そういう高齢者の情報がほしいという声がある、あるということが見えているから情報誌作ろうって話になるわけで。課題が見えているかどうかということが、やっぱり大事です。実は、東北地方なんか回っていると、結構こういう声があるね。なんか地域の課題とかね、地域のいいところないですか？って。何もねえ。何もうちには問題ねえから。魅力、あるわけねえだろう、この地域に。とかね。箸にも棒にもかからなすぎる。これを言っていると、協働は始まらないんだね。まあいいよね、あの、別に何もなくても。だけど、ないわけがなんです。人がそこに暮らしている限り。必ず何か困っている人がいる。町内会長さんであれば、ごみの集積所の管理で困っているとか、いろんな細々としたことがあるはずで、そういうものが見えているからこそ何ができるの？何ができないの？っていう議論になるわけですね。ここ大事。そして今日は、ここの左端にも書いてあるように、目的の共有って一番最後にも書いてあるように、まさにこれは目的ですよ。協働するための目標、目的なんだ。何のために頑張るかが分からなければ、頑張れないはずですよ。何のために協働するかがわからなくて、協働してるとしたら、それは協働させられているんだ、誰かに。何かが目的があるから、力を合わせないとだめだよって話だよ。もちろん、この地域課題の目的は、自分たちだけで解決できるものもありますから、何でもかんでも

協働じゃないからね、繰り返したが。できないものがあるときに協働。だけどそのためには、地域課題。目的の共有が大事じゃないかなということです。 番、もう1つ大事なのは、これは1年前にも申し上げたんですけども、横のつながりを作るんです。そこに1行目。補助金、各種団体、各種委員の委嘱ってこう書いてあるように、ねえ、先程高崎の市民が役人とか言ったように、いっぱい地域にはいろんなお願いや依頼がきてるわけだ。委嘱されたりして活動してる市民の方もいらっしゃるはず。結構大変なんですよ。ところが結構似てるようなものがあるんだよね、この中には。この前職員研修でも言ったよね。例えば、健康づくりは大体街の中には4種類くらいあるよね。健康増進法、健康日本21、増進法に基づく健康体操と、介護予防のための介護保険法に基づく健康体操と、公民館の成人学級でも健康体操をやっていて、とどめは社会福祉協議会でも健康体操をやっている。事務局はみんな違うのに、下手すると集まってきて体操してる人はいつも同じ人みたいな、ねえ。本当これは高崎のネットの彼が言ってたんだけど、先生、俺全部したら腰を悪くしたんだ。体操しすぎて体が具合悪くなったって話だからね。これ、まじめにそういう話だから。なんせいつも老人クラブに問い合わせがくる。だから、いつも同じ人が行かなきゃねえって言って。まあ、それが原因で腰を悪くしたかはわかんないけども、なんか健康を害したって話だね。交通安全、山のようにあるね。交通安全協会、防犯協会、交通指導会、防犯実動隊、交通安全母の会、よく言えるでしょ。こんなにあるのに、防犯パトロールをやってくださいっていうんですよ。これ、なんぼ悪いとこにいるのって話なんです。訳分からんよ。同じようなものがいっぱいある。だからその、今言った5つか6つの役を担っている人が皆集まって、話し合いやって、これやって。今どうなってるかっていうと、同じ日にポスター、あの一、チラシを配っている。キャンペーンをやったりして。同じ日にやってしまおうと。で、防犯パトロールだけは、1年を通してきちんとやっていこう。そしたら、1年後行ってみるとすごくよくなっている。まず、会議の数が減ったと。全国ばらばらで会議をやっているから。次、1回の事業に集まる人の数が増えた。そりゃそうだ、連携しているんだから。一番面白いのは、これ、金が集まるようになったっていうんだ。みんな地元でもらっている補助金をみんな一緒にしてやるから、すごく楽になったと。だから、1年前に行ったら暗い顔して話し合いしてたんだけど、1年後に行ったらすごいよくなって、明るくなってるんだよね。つまり私が言いたいのは、何か新しいものを作ろうとするんじゃなくて、既存のものをつなげていだけでも、そういう協働をするだけでも、新しい地域課題に応えられるんだ。何も我々市民は頑張っていないんじゃないんですよ、いろいろやってんです。いろいろやってんだけど、今日冒頭で言ったように、今までどおりのやり方では続かないから、横に繋がったり、似たような事業を1つにしたり、そういう工夫が必要ですよ。いうことを申し上げたいわけだ。従って、かぎ括弧にあるように、これからの協働はどうしたら活力ある地域を持続できるか、続けていけるか。しかし、実態としてはそこに書いてるように、市民力の分断と私は言ってるんですけども、皆さん意外と気付いていないけれども、行政のことを縦割り縦割りと批判されるが、実は一番それによって縦割りになっているのは、地域だったりもするわけです。みんなその縦割り行政から頼まれてるんだから。そういうふうに、本当は地域がもっと力を持ってるはずなのに、ばらばらで活動をして、疲れちゃってるっていうところもあたりはしないかと。この辺はすごく話し合いで出てくることです。実際地域でやるから。そして一番大事なのは、最後に書いてる高齢化と担い手のことだよね。今までどおり皆が若くて元気でやれたらいいけど、これから厳しくなってくるんだから、やっぱりつながりを作ることが大事。だから、かぎ括弧にあるように、大事な発想としては、本当に必要な取り組みってなんだろうかと、この発想大事。行政っていうのは、絶対にとってもいいほど市民を差別できないんです。この地域に必要なもの、この地域でなければ必要なものっていうふうに、こうそれぞれの地域にあわせたサービスをやっていけば一番効率的なんだけど、ところ



が行政は、平等、公平、画一が大原則だから、同じようにサービスをしないとだめだという、そういう、まあ縛りというか、考え方が基本にあるわけ。ところが、同じサービスをもっても、俺はもう腹いっぱいだという地域と、十分だっている地域と、うちはそれじゃ足りねえわっていう地域があったり、いや、うちの地域は、本当はこの取り組みが必要なのに、それは行政がサポートしてくんねえかなとかね。本当は地域って個性があるから、それぞれに事業や活動の内容が違わなければならないし、課題も違うはずなんだけども、それに合わせた対応はできなくて。これからは協働の時代だから、自分の地域に必要なことは何だろうかと。そこに横に手を繋ぎながら取り組んでいく、ということがこう大事なんです。本当に必要なことは何だろうかと。これは、お集まりの皆さん、各種団体、NPOや、まあそれから、従来型の経済団体にも、全ての団体に共通する考え方です。最近の私の行く研修だと、お医者さんとかね。医者なんかすごいですよ、研修。医者じゃ解決できないことがある。認知症の問題なんかまさにそうだね。医者は薬を投与すりゃ、仕事をした、って満足するんだけど、実際に認知症で悩んでいる家族の方は、ねえ、薬だけではだめで、地域を出て歩いて回っちゃったりね。それは地域との連携・協働がなければだめだという話があったりとか。保育所とか幼稚園なんかからも研修やなんか求められる。自分たちだけではできないし、本当に必要な取り組みは何かを見出すことが大事だよ、ということであります。さて最後に 一番。結局協働って何なんだ、って言われるのに、私は、何でもわかりやすく言う人ですけどね。さっき言ったように、その一緒に草刈をやるっていうのはこれ共に同じと書く共同と言いました。この13の力が働く協働の本義は、自分が変わるということを意味しています。だから 一番に書いてあるのは、共に変わる。共に変わるが協働の本義です。この草刈をするという共同作業は全然いいことよ。私も町内会の事務役員やってますけど、ちゃんと自分のところの草刈もやりますが、これは何も自分が変わらなくていいわけよ。今までどおりの自分で力を合わせればいいわけだから。一緒に働く。なるべく人がいっぱい集まろうが。いや草刈りとか。でもこの協働は、例えば、突然降って沸いてきた地域課題に伝えるわけだから、例えば、行政であれば、行政の担当部局が今までやったことのないような、前例のない仕事をやらなきゃならなくなるかもしれない。だから自分が変わるっていう発想がないとだめなんですから。うちの課ではそんな業務をやったことがないんだとか、そんなこと言ってりゃ協働になんねえわな。逆に、逆に市民の皆さんも、うちの町内会は、そんなこと毎年やってないからな、と言っちゃったら、協働は前にいけませんわね。自分たちで今までやったことのないことを、やらなきゃならないかもしれない。前例のないことをやらなきゃならないかもしれない。自分が変わるということが、協働のこの13の力が働く言葉の本義であります。従って2行目にあるように、私もよく分かりやすく言うんですけども、行政も変わる。市民も変わる。これだ、今日は。まちづくりは、行政の独占物ではありません。行政が何でもやってきたんだけど、行政の独占物じゃない。だからといって、ちょっと財政が厳しくなったからといって、まちづくりは市民に押し付けるものでもありません。市民も、行政も、です。ここは大事です。勘違いが多いところが多いので、多い自治体があるんで、これから協働を描こうとしている三沢市さんには、是非そこはご理解頂きたい。行政も変わる。市民も変わる。一緒に変わることを協働と言うんだ。従って最後にあるように、新たな役割、新たな関係を見出していくプロセスのことを、協働と言うんですよ。まあ今日ここでも申し上げたように、一連のこうしたプロセスのことを協働と言うんだよ、ということこそ是非ご理解頂きたいな、というふうに思います。今日私は、少しこう全国的な動向からお話をしました。これから後半の議論の中では、今度はまさに三沢市に根ざした皆さん方がお話をされますので、少し三沢市に根ざした協働の議論、これからどんなふうに進めていけばいいの、ということの後段の方で私も参加しながら議論していきたいというふうに思います。まずは私のお話はここまでと致したいと思います。どうもご静聴ありがとうございました。